地域おこし協力隊年度活動報告（令和3年度）

不撓不屈の劇団旗揚

2022年3月16日
梶原涼晴

もくじ

１．はじめに

２．サーラ・デ・うすき「リーフデカフェ」ローンチ

３．「DIVINE GARDEN」ローンチ

４．「TAKEYOI ANOTHER STORY」決行、そして継続

５．劇団ムジカ旗揚（三度目の正直）

６．総括と今後に向けての展望

1. はじめに

「劇場は時代を映す鏡」

～ステラ・アドラー～

僕の演劇観を象徴する言葉です。

さて、協力隊として三年目を迎えてもなおコロナ禍終息の目処は立たず、

文化芸術に携わる身としては不要不急と一蹴されることは減りつつも前途多難。

でも決して立ち止まらず、与えられた現状を冷静に受け止め、大局観に立ち、

不要不急ならぬ不撓不屈の精神で活動を継続して参りました。

2. サーラ・デ・うすき「リーフデカフェ」ローンチ

文化芸術を通じた地域おこしと並行して、中央市街地の活性化にも取り組みました。しかし、コロナ禍の影響はもちろん文化芸術だけではありません。
むしろ飲食業へのダメージははるかに大きいと言えます。そのような環境下、敢えての「飲食」です。

「リーフデカフェ」2021年7月グランドオープン！

グランドオープンは当初春に予定していたのですがやはり例にもれず、3ヵ月以上遅れて7月にようやくグランドオープン！
オーナーは、僕が臼杵に移住することになった直接のご縁である亡き師匠、塩屋俊監督の大学時代の先輩である小山卓也さん。

もともとは海鮮レストランだった佇まいを、フルリノベーションしてこんなのオシャレな空間に。
そして備え付けられていた大きな水槽は、なんということでしょう、、、

ステージ！！

ここにも芸術のDNAを注入させていただきました。
いつの日か、たくさんの人たちがここに集い、美味しい食事と、そして音楽や演劇などを楽しめる、そんな日を心待ちにして、
こちらも不撓不屈の精神で元気に営業中！お近くにお立ち寄りの際はぜひリーフデカフェでアーバン＆ロハスなひとときをお過ごしください。

そして早速リーフデカフェのステージを活用してみました。

ご時世的に、ささやかに、ひっそりと、リモートで・・・

BNAW×STELLA ADLER JAPAN ONLINE TALK SESSION brought to you from LIEFDE CAFE

コロナ禍の現代を俳優はどう演じるか

日時：2021 年 8 月 19 日（木）

第一部：トークセッション（ゲスト：ボビー中西／ MC：梶原涼晴）19：00 ～ 20：00

第二部：オンライン観覧者とのインタラクティブ Q&A セッション　20：15 ～ 21：00

【会場】

リーフデカフェ（〒875-0041 大分県臼杵市大字臼杵 210-3 ☎0972-64-7271 サーラ・デ・うすき内）

【参加費】

無料（ZOOM でのご参加となります）

【対象・参加条件】

年齢性別、居住エリアを問わず無料でご観覧いただけます。ただし、参加条件は、Wi-Fi 等、インターネット環境があり、携帯またはカメラ機能付きのパソコンをお持ちで、オンライン会議アプリ「ZOOM」のご使用に問題のない方に限ります。参加ご希望の方は以下宛にご連絡いただければ、折り返し事務局より ID とパスワードをお伝えいたします。また、「ZOOM」インストール他、事前に必要なセットアップに関してもお気軽にお問合せ下さい。

【ご予約窓口】

8 月 17 日（火）までにアクターズクリニック事務局（☎03-6383-4770 ✉actorsclinic.tokyo@gmail.com）までお申し込みのご連絡をお願い致します。（お電話でのお申し込みをいただいて留守番電話になってしまった場合は、お手数ですがご連絡先とご用件をご伝言いただければ事務局より折り返しご連絡させていただきます）

【主催】

アクターズクリニック臼杵サテライト

【協力】

BNAW（ボビー中西アクティングワークショップ）、株式会社まちづくり臼杵、株式会社 DIVINE、株式会社カノア

ACTORS CLINIC
USUKI SATELITE

〒875-0041 臼杵市大字臼杵210-3 サーラ・デ・うすき内 アクターズクリニック臼杵サテライト Tel. 0972-64-7271 email. actorsclinic.oita@gmail.com HP. actors-clinic.info

急速に肥大化する仮想現実という需要。俳優の使命、 そしてリアリズム演技のゆくえは。

世界がコロナ禍一色になるずっと前から、日本の舞台芸術・映像芸術に対する需要の多くは、遊園地のアトラクションのような商業娯楽へと様変わりしています。そこで観客から求められる体験は「現実逃避」であり、俳優にはしばしば、観客を仮想現実の世界へと誘導するような演技（いわば「超」リアリズム）が求められます。このような需要の変化を経て、現実社会や人間の本質を映す鏡とされてきた「リアリズム」というアプローチは、果たしてこれから先も俳優の演技に必要とされ得るのでしょうか。この度、日本におけるマイズナーテクニック指導者であり、リアリズム演技の権威であるボビー中西さんをゲストにお迎えし、舞台芸術・映像芸術の世界におけるリアリズム演技のゆくえについて、そしてこれからの世界で俳優が背負うべき役割についてお話をさせていただく機会が実現いたしました。コロナウィルス感染拡大防止の観点から、オンラインでの開催となりますので、全国どこからでも、どなたでもご参加いただけます。

コロナ禍の先にルネッサンスを。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

– Stella Adler Japan / ACTORS CLINIC 代表 梶原涼晴 –

GUEST：ボビー中西　BNAW（ボビー中西アクティングワークショップ）主宰

BNAW（Bobby Nakanishi Acting Workshop）：2007 年ボビー中西が NY 在住時にスタートした演技ワークショップ。2011 年より東京をベースに青山治、土井宏明、野田英治、関幸治ともに俳優育成をしている。BNAW 主宰、演技講師、演出家、全米映画俳優組合員、舞台俳優組合員 NY・アクターズ・スタジオ生涯会員（日本人で 2 人目）、東京大学非常勤講師、新国立劇場演劇研修所マイズナー講師、渡辺ミュージカル芸術学院演技講師。高校卒業後、コント赤信号に弟子入り。1990 年から 2011 年まで NY を拠点に活動。名門ネイバーフッドプレイハウスでサンフォード・マイズナーから直接演技指導を受ける。2007 年より演技指導をスタート。水田伸生監督 WS サポート、飯塚健監督 WS 主催、飯塚花笑監督、戸田彬弘監督とのコラボ WS、大手事務所、瀧内公美などの個人レッスン多数。演技コーチとして Netflix「全裸監督」（森田望智個人レッスン）、園子温監督「エッジャー通りの赤いポスト」、天野千尋監督「ミセス・ノイズィ」など多くの作品に携わる。2019 年には演出を手掛けた「男が死ぬ日（作・テネシー・ウィリアムズ）」でバッカーズ演劇奨励賞プロデュース賞受賞。著書に「リアリズム演技」（而立書房）現在までに子役、高校生、ダンサー、ミュージシャン、ミュージカル俳優、アイドル、ハリウッド俳優、アカデミー賞ノミネート俳優など、多くの日本、世界で活躍をする俳優を指導している。その数は、延べ 6000 人を超す。ホームページ：https://bobbynact.com/

MC：梶原涼晴　アクターズクリニック／ステラ・アドラー・ジャパン代表

1996 年～ 2006 年の 10 年間に亘り株式会社博報堂にて広告プロデューサーとして自動車関連企業、菓子関連企業のトップブランドの広告制作に携わった後、単身渡米。マーロン・ブランド、ロバート・デ・ニーロらを輩出した演技学校の殿堂ステラ・アドラー・スタジオにて 2 年間に亘り演技を学ぶ。ニューヨーク滞在中、マンハッタンウェストヴィレッジ「Independent Theatre」でのプロデュース舞台公演等、アーティストとしての活動を経た後に日本に帰国。帰国後は恩師でありアクターズクリニック創設者である塩屋俊氏に師事、俳優養成、映画製作、舞台プロデュース等、演出家として携わる。2013 年の塩屋俊氏急逝を受け、アクターズクリニック事業を継承。精力的に俳優育成事業に取り組み、現在に至り数多くの俳優を輩出している。演出家としては、ニューヨーク在住時の活動母体であった Kamakaji Lab をルーツとした劇団 GROUP THEATRE を主宰。かつてステラ・アドラーをはじめとした近代リアリズム演技の巨人たちが劇場に時代を見出したように、演劇を通じて現代社会を描き、あるべき人間の姿を模索し続けている。2019 年より大分県臼杵市に移住、文化芸術を通じた臼杵市の地方創生に取り組む。2021 年 4 月には、イギリス人として初めて日本の土を踏んだ航海士「ウィリアム・アダムス（三浦按針）」が臼杵市の黒島に辿り着くまでのドラマを描いたショートフィルム「ANJIN A NAVIGATOR OF LOVE」が公開されている（https://youtu.be/-T-K7iDf9ZM）。

ACTORS CLINIC
USUKI SATELITE

〒875-0041 臼杵市大字臼杵210-3 サーラ・デ・うすき内 アクターズクリニック臼杵サテライト Tel. 0972-64-7271 email. actorsclinic.oita@gmail.com HP. actors-clinic.info

マイズナーテクニックの日本での第一人者と（手前味噌ですが）ステラ・アドラー・ジャパンの代表が臼杵でトークセッションをするという企画自体、とんでもなくレアな出来事だったように思います。今後もリーフデカフェにいろいろなゲストを招いて情報発信をしていきたいと思います。

3.「DIVINE GARDEN」ローンチ

不撓不屈のチャレンジは続きます。リーフデカフェのオープンからほどなくして、2021年10月、中臼杵にある木ヶ畑にDIVINE GARDENをプレオープン。歴史ある古民家、そして隣接する800坪のスペースを、以下のコンセプトに基づいて活用していきます。

臼杵の風が教えてくれる
土も水も呼吸してる
今度は蝶々が遊びに来てそっと耳打ちしてくれる
花の香りを嗅いで見てごらん
それから私は深呼吸して
まとわりついている時間をそっと手放してみる
するとようやく思い出す
この世界は生きている
そして私も生きている

私に還る場所

ELEMENTS FOR HUMAN NATURE

DIVINE GARDEN

www.divinejpn.com

DIVINE

www.divinejpn.com

辺り一面に草木がうっそうと生い茂った800坪の敷地を、手作業でここまでスッキリ。

春には牡丹桜が咲き乱れ、龍王様が見守る楽園、DIVINE GARDEN。

これからもじっくり時間をかけて臼杵の魅力を体感できるスポットへと変身させて参ります。

4.「TAKEYOI ANOTHER STORY」決行、そして継続

街を仕掛け、土に触れている間にコロナも去っていることを願っていましたが、不撓不屈の日々は続きます。
23年続いた「うすき竹宵」が遂に規模大幅縮小に追い込まれた2020年、臼杵市全体に漂っていた寂しい空気を何とかして明るくしたいと願い、
ひとつの脚本を仕上げ、無観客公演を実施、うすきチャンネルで臼杵市内外の方々に観ていただきました。
そして完全復活とはならなかった2021年うすき竹宵、臼杵ケーブルテレビさんをはじめ力強い支援者の方々の協力を得て、
同作の再演を果たすことができました。来年はきっと今までのどの年よりも多くの竹ぼんぼりと、たくさんの来場者に囲まれて開催できることを願いつつ、
「みんなあの苦しい時期を乗り越えたね」と笑い合えるためにもこの公演は毎年続けていきたいと思います。

5. 劇団ムジカ旗揚（三度目の正直）

2021年の不撓不屈チャレンジ締めくくりは、前年度にコロナ禍のため中止となっていた、
三浦按針没後400年・日蘭交流420周年記念舞台公演「ANJIN A NAVIGATOR OF LOVE」の実現です。
前年度の中止、そして東京での挑戦、ショートフィルムの製作を経て、旗揚公演を5月に実現すべく準備を進めていたのですが、
再びコロナの急襲を受け断念・・・

再び中止

そして遂に三度目の正直。悶々と葛藤することおよそ1年と半年、蔓延防止の隙間を縫って満を持しての旗揚公演が実現しました。

ムジカ、とは、ラテン語で音楽、という意味です。
戦国時代に九州六ヶ国を治めた大名、大友宗麟が建国を夢見た国は、ムジカ国。
誰もが平等に、健全に過ごすことができて、
誰もが平等に、幸せになる権利がある、そんな国。
彼は実際、領内に無料の病院や孤児院を建設するだけではなく、
日本で初めて西洋音楽や西洋演劇を取り入れたそうです。
隣国との間では矢弾が日々飛び交う中であったにもかかわらず、
彼が音楽や演劇をはじめとした芸術を積極的に奨励したのは何故でしょう。
それは、健全な国づくり、ひいては人の幸せには、
芸術が不可欠だ、ということを知っていたからなのではないでしょうか。
今、戦国時代よりも無秩序に、
お金や情報という矢弾が私たちの周りを飛び交っています。
そして芸術への純粋な興味や情熱は、
それら無秩序な矢弾に当たっては砕けています。
でもそのままでは、いつか私たちは、
芸術はおろか、幸せとは一体何だったのかを忘れてしまう。
だから今、少しずつ、少しずつ、つくっていきたい。
芸術がまずそこにある環境を。
それがきっと、ひとをつくり、まちをつくり、あしたへと繋がっていくはず。

芸術がひとをつくる。芸術がまちをつくる。そしてあしたへ。
MUSICA THEATRE

劇団ムジカに関するお問合せ：アクターズクリニック臼杵サテライト事務局（サーラ・デ・うすき内）
〒875-0041　大分県臼杵市大字臼杵 210-3 TEL：0972-64-7271 Mail：actorsclinic.oitako@gmail.com

東京公演で主演を務めた文学座奥田一平に代わり、我らが協力隊、林佑太郎を主演に迎えての3日間、延べ6公演を行った結果……

大・盛・況！

各公演終演後に久家の大蔵を後にするお客様の表情を見て、不撓不屈のチャレンジがまたひとつ実を結んだと実感することができました。

臼杵地域おこし隊員らの劇団ムジカ

あすから旗揚げ公演

按針を題材に「観客に希望与えたい」

【臼杵】臼杵市の地域おこし協力隊員らでつくる劇団ムジカ」の旗揚げ公演「ANJIN-A NAVIGATOR OF LOVE」が17～19日、市内である。徳川家康の外交顧問として活躍した三浦按針（ウィリアム・アダムス）にスポットを当てた舞台。座長で隊員の林佑太郎さん31は「コロナ禍で先行きが不安な今だからこそ、観客に希望や気付きを与えたい」と意気込む。

林さんは北海道帯広市出身。東京で俳優や俳優養成学校のアシスタントとして経験を積んだ後、臼杵の街並みに魅了されて2020年3月、地域おこし協力隊員になった。演劇などを通じた活性化策を探る中、新型コロナウイルスの感染状況がようやく改善。有観客の公演のめどが立ったという。

劇団は林さんや、東京の劇団などに所属する団員ら計8人で構成。11月初旬から臼杵に泊まり込んで連日の稽古を続ける。

物語は按針の生きざまを学ぶ若者を主人公に据えた。1600年にオランダ帆船「リーフデ号」で黒島に漂着した按針、日本と海外の交流などに尽くした功績を織り交ぜながら、葛藤を抱えて生きる若者たちが人生のヒントを見いだす姿を表現する。

脚本・演出は同隊員で演出家の鴨原涼晴さん48が担当した。「失敗も人生の一部。作品を通して行動することの楽しさを若者に伝えたい」

林さんは「舞台芸術を身近に感じてほしい。臼杵の地で演劇仲間を増やしたい」と話した。

公演会場は市内臼杵の久家の大蔵。各日とも午後1時から2回（11日のみ同2時と同6時から）。定員は1回につき50人。チケットは前売り3千円（高校生以下千円）、当日3500円（同1500円）。

予約は電話（☎090・7292・64・7ヴァー1）、またはメール（actorsclinic.tokyo@gmail.com）。

（大谷田布紀）

本番に向けて稽古に励む劇団員＝臼杵市

6. 総括と今後に向けての展望

以上の他にも、篠笛奏者狩野泰一さんの久家の大蔵ライヴプロデュース、臼杵サテライトでの俳優育成等、
思い返してみると悪戦苦闘しながらもこの異常事態でしか味わうことのできない学びに満ちた日々だったように思います。
ただ、コロナ禍を経て今もなおその影響があらゆる側面で拡大していくことが想定されている中、僕の中に耐えずまとわりついている
大きな不安要素が消えることはありません。それは、長引くコロナ禍によって（特に青少年の）感受性と想像力が日に日に失われているという現実。
今地球上で起きている終末すら予感させる戦争をはじめ、人が人の命や尊厳を無慈悲に奪うような行動の多くは、
想像力の欠如が大きな原因のひとつと考えられています。また感受性が鈍化していくに従って、人の心は徐々に無機質になり、
やがて生きることに希望や喜びを持てなくなり、自死や引きこもりといった選択肢へと繋がっていく・・・
僕は、これから先の社会において人々が失われた感受性と想像力を再び取り戻せるか否かは演劇をはじめとした芸術にかかっているはずである
と強く信じています。かつて中世の時代にペストが大勢の人々の命を奪った後、ルネッサンス（文芸復興）が始まったように。
長かったパンデミックの先の世界で、僕は残りの生涯のすべてを使い、ここ臼杵の地から失われた感受性と想像力を取り戻す取り組みを続けていきます。
締めくくりに、三浦按針の生き様について東京臼杵人だよりに寄稿させていただいた内容をお届けして年度報告とさせていただきます。

三浦按針の生き様
（混沌の現代を生き抜くヒント）

演出家／地域おこし協力隊　梶原 涼晴

按針についての一般的な理解は概ね、規格外の「運」に導かれた人、というようなイメージでしょうか。現存する記録から按針の足跡を辿ってみようと思います。

今から400年以上昔、太陽の位置と、風の向きと、潮の流れを頼りに、冒険者たちがこぞって命がけの挑戦を繰り返していた大航海時代。按針はスコープ越しに見える景色の遥か向こうにある未知に自身の人生を見出すべく行動に出ます。祖国に妻と二人の子を残し、壮絶な悪天候、飢え、そして疫病に何度も死を覚悟し、多くの仲間と愛する弟を失い、1年と10か月に及ぶ地獄の航海を経て黒島に到着。日本で彼を待っていたのは死罪の危機。それを幾度となく乗り越えた末に、なんと徳川家康に召し抱えられることに。その後二度と祖国に戻ることはなく、当時イギリス人として唯一帯刀を許された「青い目のサムライ」としてその生涯を日本で全うする……　最初から「あなたの人生はこれこれこういう旅程になっています」と言われたとしたら、私なら迷わず家族とともに祖国での生活を続けるでしょう。按針もさすがにこんな顛末が待っていると予め知っていたとしたら日本には来ていなかったかもしれません。

現代を生きる私たちの多くは確証のない物事には触れようとしません。ましてや未知に対してロマンを感じ、未知に自分の人生を見出そうとは決して思わないでしょう。なぜなら私たちは、清濁が混在し溢れかえる情報に、無限であるはずの想像力も、未知へと向かう冒険心も、行動を起こす勇気も、奪われてしまっているから。

もし按針が今の時代を生きていたとしたらどうでしょう。彼ならきっと、未知に向かって進むことを必死で悩み考えた末に決断し、その航路に障害や困難が立ちはだかるなら痛みと苦しみを背負ってでも真正面から立ち向かっていくのではないでしょうか。

按針の生き様は私たちに、想像力と冒険心をもって行動すれば、いかなる困難も必ず乗り越えることができるのだということを教えてくれているように思います。

さて、そんな私的かつ希望的妄想によってつくりあげられた三浦按針像をコロナ禍の現代に投影した作品が、２０２０年11月に浅草九劇で、２０２１年12月には臼杵市久家の大蔵で上演した舞台であり、２０２１年4月に公開したショートフィルム「ANJIN A NAVIGATOR OF LOVE」です。

益々混沌を極める現代。環境は容赦なく私たちを困惑させ、疲労させ、痛めつけます。ここで述べたように、按針のごとく強い信念を貫くことは簡単な事ではないでしょう。でもだからこそ、この世の中には疲れ果てて傷ついた心を癒やしてくれる魔法のような何かが存在しているのだと思います。按針がかつて日本の人々から、日本という国から、失った多くのものと引き換えにその何かを受け取ったように……　ところで、按針の命を最後まで守り抜いて黒島に辿り着いた船の名は、リーフデ号。日本語で愛という名の船でした。

「昨日を悔やむ人は、明日には今日を悔やみ、明日を怖れる人は、明日には明後日を怖れるだろう。
そしてある日ふと気づく、私の今はどこにあるのかと。
だから、過去の失敗や未来への不安であなた自身を縛らないで。
外へ出て、今を見つめて、今に衝動を感じ、今、行動しよう。
その行動は時に誰かを傷つけるかもしれない。
そしてそれによってあなたの心も傷つくだろう。
その傷は痛く、でもその痛みは遂に愛を教えてくれる。
大丈夫、心配しないで。
あなたが全てを失ったとしても、愛は決してあなたから離れはしないから」
（舞台「ANJIN A NAVIGATOR OF LOVE」モノローグより抜粋）（有田）